UrbanDesignLab.Magazine 2
都市デザイン研究室マガジン
vol. 275 / Feb. 28th 2019

研究にみる それぞれの思い

Each Research Embodies Thier Thought.

自分が主体となり行う研究には、その人の考えが強く表れる。今季修了した学生の論文および設計の内容を振り返りながら、学生にとっての研究を特集する。

同期で模型をセッティングしあう。B4 の卒業設計審査の一幕

審査という一つの区切り

Thesis Review, A Real Milestone for Graduates

text_MAEYAMA /M1

秋学期も終わり、今年も多くの学生がそれぞれの研究に一区切りをつける時期となった。　都市デザイン研究室からも、博士１名、修士４名、学士３名が審査に臨み、それぞれが無事に発表を終えた。

修士１年の私は、卒業設計に取り組む後輩を見て昨年を思い出し、論文執筆に励む先輩を見て来年の自分のすがたを想像する。まだスタートラインに立ったかどうかも怪しい自分の修士研究は、１年後どんな答えを出しているのだろうか。このまま研究をすすめていいのだろうか、そもそも私たちにとって研究とはどういうものなのだろう？

研究について悩むことの増えてきたいま、先生や先輩の話を聴きながら、また、審査を経て何か「答え」を得たはずの人々のメッセージを読みながら、改めて考えいきたい。

２月号の内容

○ インタビューその１　中島先生、永野先生
○ 修士研究、卒業研究内容紹介
○ インタビューその２　博士課程 宮下さん
＋ Information

指導教員に聴く、今年度の研究

Interview with Laboratory Teachers about This Year's Research

一つ目のインタビューでは中島先生、永野先生にお話を伺います。研究室会議での議論だけでなく、個別に相談を受けたり様子を見てくださったりしていた両先生。一番近くで指導をしてきた先生方には、今年度の研究はどのように映ったのでしょうか。そして今年度を振り返り、研究室として、あるいは自分の研究を進める学生それぞれとして、どのように研究と向き合っていくべきなのでしょうか。富山プロジェクトのメルボルン視察の現場から、修了生一人一人へのコメントや、来年度に向けてのメッセージを頂きました。

（聞き手：M1 山口　編集：M1 前山）

▲インタビューはメルボルンでの昼食中に行いました

―審査が終わったということで、振り返りを兼ねてお話をお願いします

中島：製本するまでが研究なので、そういう意味ではまだ誰も終わっていません。

―まずは卒制について

中島：２人でしたね。どちらもスケールが大きな計画で、最後まで辿り着けたかというと……。
應武さんは、鉄道という趣味から始まったのは良かったのですが、都市計画上のテーマとの接続が見えにくかった。これからの都市にとって何をメッセージとして出すかを考えなくてはいけない。具体の設計やデザインについてはもっと検討が必要です。もっと色々できた気がします。辛口すぎるでしょうか（笑）　テーマがずっと変わらず、自分の関心を貫きやり遂げたことは評価します。車庫への着目は新しくて面白かった。

永野：卒制はメッセージ性が必要。今大切なことではなくて次の時代に必要なこと。その意味では鉄道と街の接点にパラダイムシフトを起こしたい、そういう熱意がチャレンジングで素晴らしかったと思うんだけど、まだ見えない未来を私はこう描き切るんだというところを、もっと大胆に表現して欲しかったかな。

中島：沼田君は西新宿の超高層ビル街へのこだわりがあった。西新宿をどうするかというストーリーは一緒に議論しながら考えて、それはそれで斬新な見方だったけど、最終的に新宿西口の計画としてまとめることが良かったのかはやや疑問がある。輪講から興味をもったから本人がどうしても西新宿全体への提案にこだわったのかな。あと、最後終わっていないんですよね。模型が先行して図面が……。なので今頑張っていると思います。

永野：泊まるをテーマにした３年演習とか、西新宿でやった輪講から接続を頑張って試みてもらったつもり。そういう意味ではまだ少しかもしれないけど蓄積ができてきてるから、それをどんどん活かしていって欲しい。
卒制では問題作を作ってほしいんですよ、問題作を期待してるんです。そのためには、表現者であれ、ということを言っておきたい。

―卒論はどうでしょうか

永野：佐鳥君も趣味からアプローチしたんですよね、軍港都市。テーマを早めに絞り込んで、現地にも度々足を運んで、オリジナルの資料をしっかり集めてくれたことを評価したいですね。他の人がパッとできるような感じではない、個性ある研究になったと思います。

中島：枠組みとかの議論をしすぎて、具体的な分析とかの議論ががずいぶん直前になってしまった。意外と分析出来ていないじゃん、みたいな。もっと分析できるだろと。テーマは面白かったし、ちゃんと

編集長：中戸翔太郎　編集部員：岡山紘明 , 但馬慎也 , 原洪太 , 藤原大樹 , 前山倫子 , 山口智佳　東京大学都市デザイン研究室　http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/

発見したこともあった。資料を集め、整理するのが大変だったと思う。
永野：もうちょっと早くから地図ベースで議論できるとよかったかなと思いますね。文献調査がメインだったから、ずっと文字ベースで。その意味では最後の一週間でグッとクリアになった。
中島：論文は最後になって、パワーポイントを作成して初めて論理構成が明確になるね。指導が遅いのか。
永野：我々指導側の問題ですね (笑)
中島:レジュメだけでやってるとダメだね、ちょっと前の段階で一回、パワーポイント化しないと。レジュメだと全部が追いきれなくて、何が大事なポイントか分からなくなる。
永野:修論もそうですね。研究室会議での発表を、パワポを交えるように、もう少し見直す必要があるかも。
中島：研究室会議も、初めはレジュメで良いと思うけど途中からはパワポを持って来るようにしよう。

卒論の段階では自分の創りたいものをつくって「どうじゃ！」って言って終わりくらいで良い (永野)

—4 年生全体については
永野：2 人途中で離脱してね、残念でしたが。なんとか 3 人やり遂げてくれたという感じ。
卒論・卒制は基本的には自分でやりたいことを自分でやり遂げればいいんじゃないかという気がしていて。どうしたらいいですかって聞かれるのは基本的に違うかなと。逆に言うと口を出されてしまった時はそれくらい遅れているということでもあるのだけど。迷わずにやってほしいというか。卒論・卒制はそんなに審査が厳しい訳でもないんだから、まずは創りたいものをつくらないと。修論ともなるとそうはいかないけど、卒論の段階では自分の創りたいものをつくって「どうじゃ！」って言って終わりくらいで良い。
中島：「どうだ！」って発表したときのオーディエンスの反応を考えているのかな。どういう反応を受けたいんだろう。やっぱり卒論とか卒業設計では多くの人を「おっ」と思わせるというか、驚かせる何かが欲しいよね。「はい、よくできましたね」では面白くない。成績はそれでそこそこいいかもしれないけど。
永野：見たことある設計はやらなくていい。
中島：そう。そのためには自分と対話するだけでなくて、世の中のいろんなものを見て、勉強しないといけない。一所懸命やっても、「しーん」となると残念。何も言えないほどすごいのならいいけど、そつなくて何にも言うことないなって思うのは困っちゃう。
永野：何れにしても、今年の二人の設計はダイナミックでしたよね。
—それはサイズが？変化が大きい？
永野：サイズもそうだけど、根本的に空間を提案してやろう、というような。
中島：最近は、分析は徹底しているんだけど、提案はちょっとしたリノベーションで満足する傾向がある。良くも悪くも何を変えたのか分からないような。今年の二作品はそうした傾向とは異なっていましたね。
永野：スケールを横断できるのが都市工の強み。そう考えると、今年の 2 人はまだまだスケールを横断しきれてなかったかもしれないね。大きいスケールはやったけど、1/100、1/200 まで落ちてない、そこは足りてなかったかなあ。粗削りでもいいからね、小さいスケールまで辿り着けると良かった。

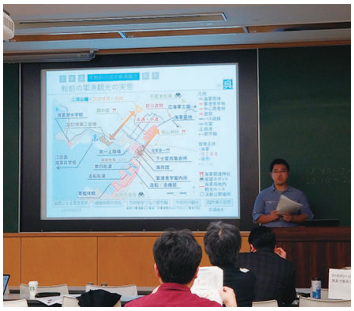
あの論文は、これからもまだまだ続きがあるんだと思っています (中島)

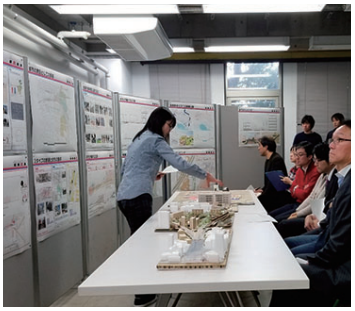
—修論の方はどうでしたか
中島：修論審査の打ち上げで、原田君と松本さんは論文の面白さに目覚めたと同時に、今回の出来には忸怩たるものがあったようなことを言っていたね。松本さんは修論審査のあと、浜田さんの輪講がらみでいきなり別の研究を始めている。原田君もね、打ち上げの時すごかったよ、論文への愛情が。
永野：発表時間だけじゃ研究についてしゃべり足りなかったらしい (笑)　それはとてもいいことだしあるべき姿。あの二人は研究者ですよね。
中島：ある意味そうだよね。探求したいことがあって、ただちょっと独りよがりなところもあったりして。松本さんの論文はね、二部構成ですが、最初の繁華街と歓楽街の研究史を整理する理論編はね、実に面白い。
永野：名文ですよ (笑)
中島：そこで期待して何がでてくるのかなーと読み進むと、後半の肝心の小岩編が時間切れで残念という。歴史を扱う論文は、理論枠組みはもちろんあるべきだけども、やはりオリジナルな史料の発掘や関連資料の悉皆的収集、つまり質量ともに圧倒的な事実が語る迫力がないとね。あと、実際にお店で働くという参与観察的方法論もうまく回収できていなかったような。要するにあの論文は、これからもまだまだ続きがあるんだと思っています。

中島：原田君の論文は福岡論。研究室会議で「論文とは今まで明らかになっていないことを明らかにするものである」「その明らかにしたいことに向かって真っすぐに論理を組み立てていく」ということを強く指導したつもりだけど、最後の段階で何とか納得してもらったかな。修論は書籍ではなく学術論文。やはり読者側にも論文を理解する思考回路というものがあって、その回路を前提として主張を展開さていくことがまず基本なんだよね。とにかく、原田君の修論には、我々も必死になりましたよ。
永野：中間ジュリーとかリハーサルとか大事な時に体調不良で、幾度となくピンチが訪れましたね。でも、期限内に終わらせたことはひとつ自信にしていい。

中島：とはいえ、実は但馬君の論文が一番、難しかったかも知れない。但馬君は途中でテーマを変えて、卒論以来の拠点論に戻ったんだけども、なかなか論点が定まらなかった。本人自身、テーマがどうもしっくりこない、テーマがこれで良いのかとか悩み続けて、踏み切れない感じをずっと受けていた。賢すぎるのかもしれない。先を読み過ぎてしまうみたいなところがあるのかも。現在の郊外住宅地で求められている拠点論と、歴史的経

博士研究・卒業研究
審査の様子





験としての拠点形成史との関係が悩みどころだったかな。私としては、今後の拠点構築も経路依存性を持つはずだから、少なくとも空間的な視点で、過去の拠点計画の成果をストックとして正確に理解し、その可能性を評価することは大事だと思っていて、但馬君の研究もそうした文脈で指導してきたつもりだったけどね。

永野：相当焦ってましたね。11 月くらいから。

中島：踏み切れない何かがあるんだろうね。

永野：でも但馬君がずっと考えていた近隣センターって、日本のニュータウンみたいな文脈でいうと過去のものみたいに思われがちだけど、今来ているメルボルンだとまだまだというか、むしろリアルタイムで実践しようとしている新しい形のものがたくさんある。最先端の都市デザインのテーマだとここで今改めて感じてます。

—清水さんはどうですか

中島：迷わなかった。対象地は最初の時からは変わっているんだけど、テーマはずっと HOPE 計画関連にしぼっていて。彼らしいよね、一つのところであれだけ、細やかに丁寧にやるというのは。卒制もそうだったけど、基本的に自分のやるべきことを安易に大きくしようとはしない、しっかり仕事をする。個人的にはもうちょっと広げてもいいのになと思っていましたが、でも精緻な所にすすんでしっかりやる、それはそれでいい。

永野：職人肌というか。作業をベースにして、議論できてました。

中島：ああいう人はもうひたすらやるだろうと（笑） あと、研究室としてかつて関わっていた八尾について修論を書いてくれたということ自体、実はとっても嬉しかった。

永野：僕は、都市を更新しながら町並みを整えていく、というテーマにはすごく共感していた。普遍的なことだし、重要なことだなあと。

中島：「街並みの復権」は、八尾固有の課題を越えた面白いテーマですよね。しっかり掘り下げていきたいな。

—博士論文については

中島：宮下君ですね。まず三年半で書き上げたというのは、素晴らしいことです。油断すると、もうちょっとかかったりするので。

永野：彼はテーマはどうやって決めたんですか。

中島：もちろん、本人が決めた。卒論からじゃないかな。「通り」の意識とか認識とか、物的存在としての街路そのものというより、「通り」という概念に関心があって。彼の故郷は静岡で通りが生きているところ。卒論は静岡の話で、修論は視野を全国の都市に広げて、昭和戦前期の主要な街路が現在までにどう変わったかを明らかにした。博論では、本人の根本的な関心である「通り」の概念を究極まで突き詰めたということでしょう。最後は西村先生からのアドバイスもあって、銀座については、都市空間そのものについての分析まで落とし込んだ。銀座通りの沿道の敷地で建築家たちが何を意識して建築を設計したかも分析した。第一部は建築家や都市計画家たちの「みち空間」に関する言説理論の整理。莫大な時間をそこに割いたんだと思う。第二部は銀座の話。宮下君は銀座街づくり会議のお手伝いをずっと続けていて。それも銀座通り連合会の 100 周年の記念誌の編集作業だから直接博論と関係している。

永野：SD など、建築雑誌の中で街路に関する記述をされているところを探して、どういう文脈で語られているかということをカテゴライズしていて、時代ごとの変遷を追っていたのが第一部。独特のアプローチの力作だった。

中島：当然だけどそんなにシンプルには整理できないので、曖昧な部分もかなりもあるんだけど、本人的には納得できたのではないかな。一言でいえば、テクノクラートたち、土木系技術官僚の活動を中心に据えた街路整備史に対抗して、より様々な主体にまで目を配った「みちの思想史」のようなものを打ち出したいというのが、論文の核となっているアイデア、情念だったと思います。そこはひとまず成功したと思うので、さて、この次はどうする、ですね。彼もこれから活動の幅を広げるんじゃないですか。まず富山かな。

永野：富山には大手モールがありますね。

中島：じゃあ富山で「みち空間」の概念の検証をしてもらおう。

堅実で実証的な態度の背後に、若者の特権の熱い思いや夢が垣間見えるというのが、本当の意味でクールな論文なんですよ（中島）

—次年度以降研究を進める学生へのメッセージをお願いします

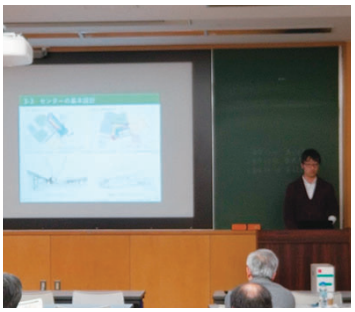
永野：まずは図を作る。自分で作ったやつをみせる。それを見て議論をするというのがなるべく早い段階で出来ると深まる。いかに最初の図をぱっとつくれるか。そのためにはしっかり時間を修論に取らないと。一日でできないから、図は。逆に、何日かかけて作業することで、そのテーマにこだわりもでてくると思うんだよね。

中島：修論は継続が大事。テーマは変わってもいいんだけど、毎日 5 分でも 10 分でも修論のことを考える。プロジェクトやっていても修論との関係を常に考えながらやっていると蓄積が違う。まあ一般論ですけど。

永野：プロジェクトとか就活で忙しい院生生活で、これはまあ今も昔もみんな一緒なんだけど。プロジェクトでの議論とか、一緒に行った街でもなんでも、何かにつけて自分のテーマに無理矢理にでも引き寄せて考えている人って、うまくいってる気がする。実践は実践で、論文は論文でってやってると、時間が足りないから。やっぱり実践と研究の接続は、常に期待したいところです。

中島：あと、これも繰り返しになるかも知れないけど、論文にはその人なりの都市や現代社会に対するメッセージを意識的に込めてほしい。堅実で実証的な態度の背後に、若者の特権の熱い思いや夢が垣間見えるというのが、本当の意味でクールな論文なんですよ。その熱い思いに反応してくれる人は必ずいるので。

—視察の合間にも関わらずお話しいただき、ありがとうございました。来年度もどうかよろしくお願いいたします。



修士研究―価値観を裏付ける

Master Thesis - Give Support to Your Sense of Values

text_HARA /M1

１月 28 日、29 日の日程で、都市デザイン研究室から、修士課程２年生の４人が修士研究審査会に臨んだ。大勢の教授陣の鋭い、すなわち厳しい目に晒されながら、この大学院での２年の、さらには学部の期間を加えれば５年、６年の集大成を述べることは大きな緊張を強いられたはずだ。しかし、その発表する姿は、研究によって各々が積み上げたものによって後押しされるように、堂々としたものであった。

町並みの復権のなされた八尾、港北 NT のセンター、支店経済都市福岡、盛り場としての小岩、どこも魅力的な都市。

政策の絡み合った、景観に対する住民の総体としての動き、初期の計画意図とその後の成功とは言えない経過の読み解き、都市という広い範囲でのその発展の要因考察、特異な都市空間の形成過程の読み解き、テーマはそれぞれ異なるが、都市の魅力の根底を詳らかにした論文４本だ。

地域型住宅への更新による町並み再生に関する研究
―「町並の復権」期における富山市八尾町諏訪町を対象に―

清水　浩晃

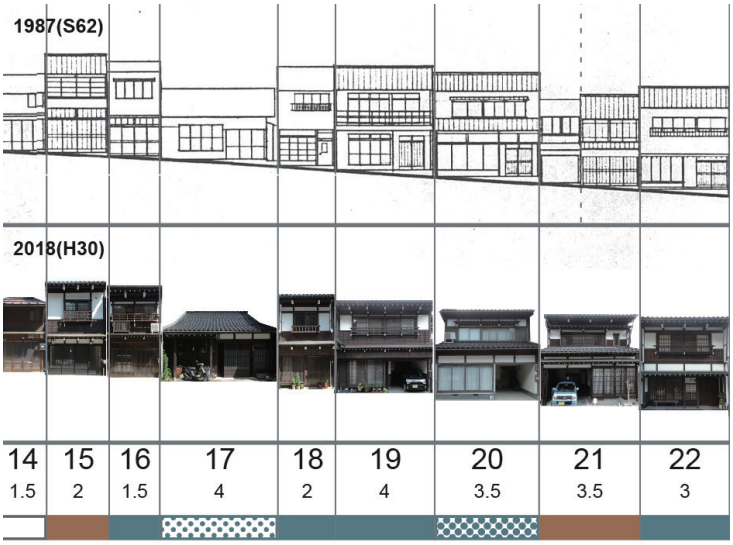
Hiroaki SHIMIZU

対象地

富山県富山市八尾町諏訪町

キーワード

町並み再生，地域型住宅，HOPE 計画



▲「町並の復権」期における各建物のファサードの変化

論文の意味

地域の気候風土・伝統文化に適合した八尾型住宅への更新により町並みを再生する試みと結果を明らかにし、八尾モデルとして提示。

論文の目的

町並み再生の一つの手法としての「地域型住宅」の有用性を提示するとともに、対象地の今後（第二世代）の課題を明らかにする。

修士研究を終えて

対象となる 140 棟の家屋の 30 年間での変化を、前後の姿と各データ、ヒアリング等から粘着質に特定していくことはとても面白かったです。八尾の人々は僕を（多分）気味悪く思うことなくむしろ面白がりながら、こちらの尋ねたことに朗らかに答えてくれました。余所者を快く迎え入れ昔話をしてくれるところだとか、空いている他人の家の軒下に毎日山で摘んだ花を生けるところに、建物の真正性以上に八尾の町並みの魅力はある、というのが論文には書いていない結論です。

同期から―但馬

地域の取り組みに注目して深く掘り下げる、都市デザイン研らしい論文と思います。隣地取得などが見られ、人口は減りつつも町並みの整備が進んだという部分に、他の地域に応用できる要素があるといいなと思いました。

土地区画整理事業によるニュータウンにおけるセンターの計画と形成
―港北ニュータウンを対象として―

但馬　慎也

Shinya TAJIMA

対象地

港北ニュータウン
（横浜市都筑区）

キーワード

ニュータウン，都市計画史，地域拠点

▲初期に建設された荏田近隣センター

論文の意味

近隣センターの計画の意図や方法、その現状を体系的に整理することで近隣センターの形成に関する課題を明らかにする。

論文の目的

各地で衰退している近隣センターの再生を考えていく中で、今一度近隣センター計画の意図を再確認していく必要がある。

修士研究を終えて

修士２年の春にテーマを思い切って変えたものの全く進められず、ぎりぎりでなんとか上げた、という感じです。それでも元々興味があったニュータウンで一本まとめられたのは良かったのかなと思います。ずっと郊外住宅地に住んでいた中で、商店街のような近隣商業に対して何か憧れていて、調べてみると計画はあったのになぜ成立しなかったんだろう、というのが卒論から通じて持っていた思いだったなと振り返って感じました。

同期から―原田

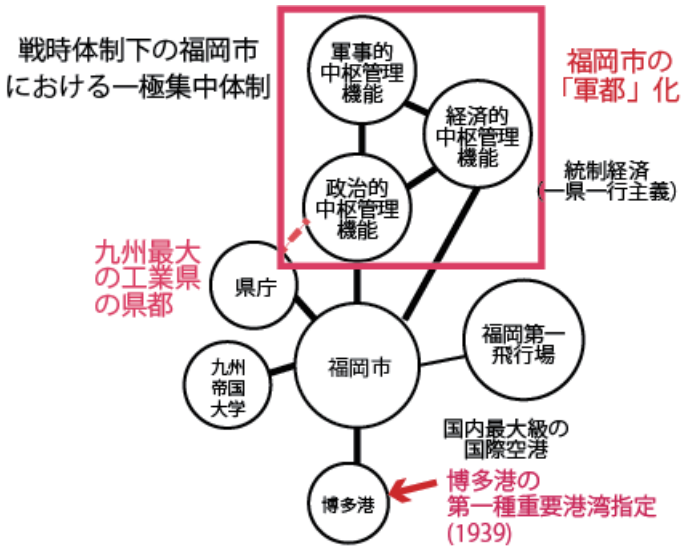
テーマはまるで違いましたが、土地区画整理事業を扱っているという点では共通しており、図表の効果的な使い方など、個人的に参考になる点も多い研究だったと思います。改めて修論お疲れ様でした。

福岡市の発展段階論考
― 1960 年代以降に確立された支店経済とその歴史的文脈に着目して―

原田　理緒
Rio HARADA

対象地
福岡市都心部

キーワード
中枢管理機能，支店経済，都市財政



▲戦時下で福岡市の地位は激変し、それは今も続いている

論文の意味
博多駅の移転と区画整理事業を福岡市の発展を論じる上でのターニング・ポイントと位置づけた上で定量的・定性的に評価したこと。

論文の目的
福岡市の発展の理由を、特に戦時体制下の一極集中と 1960 年代以降の都心部構造の再編に注目して明らかにすること。

修士研究を終えて
自分の出身地である福岡市とその発展の歴史的経緯について扱う、というのは都市デザイン研究室に入って以来の一貫したテーマでした。大学入学を期に福岡市を離れ、紆余曲折を経て都市について学ぶことになったわけですが、改めて都市という視点で考えてみると何故福岡市は近年になって顕著な発展を見せているのか疑問が出てきました。本論文を執筆する過程でその疑問を粗方解消できたことは非常に有意義であったと思います。

同期から－松本
昭和初期における九州第一の花街は博多であった。港の恩恵、日本三大遊郭のひとつに君臨した丸山遊郭 (長崎) も芸妓の数では博多の半分にも満たず。長崎を差し置いて福岡に九州を代表する花街が置かれたのはなぜか？

「花街的なるもの」を軸に読み解く小岩の都市形成史

松本　春菜
Haruna MATSUMOTO

対象地
東京都江戸川区小岩

キーワード
闇市，マーケット，赤線，商店街

▲東京にはかつて 18 箇所も赤線があった

右上図出典：愛情生活編集部【著】渡辺豪【編】『ペンとカメラが捉えた おんなのマーケットが 18 もある 東京特飲街めぐり』(原本 1951 年、復刻版 2018 年)

論文の意味
小岩における盛り場の二重構造 (繁華街／歓楽街) が、「東京パレス」と「ベニスマーケット」という二つの「花街的なるもの」に由来する。

論文の目的
極めて日本的な文脈の元に生み出される「花街」なる現象が、既存の都市空間、今回は盛り場の形成にどのように貢献したのかを示す。

修士研究を終えて
日本人 (男性) は「花街」が大好き。時代は変われどいつの世も「花街」は生み出され繁栄してきた。花魁の遊郭、芸妓の花柳界、女給のカフェー、ホステスのキャバレー、娼婦と赤線、最近ではスナックのママにソープランドのお嬢が脚光を浴びる。性別役割分担の明確な社交の場、それが我が国の文化の源泉であることを疑う者はいないであろう。良くも悪くも日本という国はそういうものだと実感する。文化は高尚なるものにあらず、つまるところ女の色気と男のスケベ心なのだ。

同期から－清水
彼女の持つ社会学的素養・問題意識を押出しながら実際の小岩の空間や都市計画の歴史を辿った異色の研究で、一定の枠内に安易に収まりがちな自分にとってすごく刺激的でした。小岩を案内してもらって楽しかったです。

宮太でみんなで打ち上げ

修士課程 1 年の 2 月に思う

text_HARA /M1

先輩方は、自分が価値を置く空間の、場所の成り立ち、そして作り上げた人々の意志、努力の汗をひも解き、空間の今を読み解いて、現代の意味を綴り上げていった。

1 年を共に過ごし、研究の目的を果たすため、徐々に解像度を高めていく姿を間近で見てきた。（もちろんこの研究室らしく、最後の追い上げは各人素晴らしいものであったことは言わないでおけない。）

修士 1 年の終わりを迎えた自分は、この彼らの 1 年を今から辿る。着実で地道な積み上げ、1 つの方法が失敗しても模索を続けること、この我慢強さと、知らないことを明らかにしたいという意志が必要だろう。

1 年後、自らの価値観を、都市の、場所の魅力を、空間の形成と今のその意味を、堂々と伝えられるようにと思い、武者震いする。

卒業研究―関心を突き詰めて、伝える

Bachelor Research - Pursue and Tell Your Interest

text_HARA /M1

浅瀬川でみんなで打ち上げ

２月 12 日、13 日の日程で卒業研究審査会に臨んだ３人の学部４年生。今年は論文１人、設計２人。各々の関心を突き詰めて、論文、設計を作り上げた。その中で当然思うようにいかないこともあったと思う。締め切りは意思とは関係なくやってくるし、技能は一夜にしては身に付かない。

しかし、自分が論文を書き上げてからの１年を振り返れば、種々の場面で論文の研究対象は考えの根幹に響き、論文を書き上げたこと自体は、都市を見る目に、弱いものであるかもしれないが、一つの尺度を与えたように思う。

彼らも４月には修士学生となる。現在の自らの関心や価値観を基軸として持ち続け、卒業研究の素晴らしい経験を、そしてこの１年で身に着けたものを、意識的であれ無意識であれ、研究やプロジェクト、その他の様々な場面で活かし、さらなるステップを踏み、面白い成果を出していってくれることだろう。

軍港都市における観光の実態と変容
―戦前及び現代の呉市の『軍港観光』に着目して―

佐鳥　蒼太朗

Sotaro SATORI

◀国防博 1935 年に呉市で行われた国防と産業大博覧会の会場図絵

▶灰ヶ峰山頂から見る呉の市街地

卒業論文で伝えたいこと

軍港都市は明治維新以降国の歴史とともに紆余曲折を経てきましたが、様々なハンデを抱えながらも現代でも軍とのつながりを有しており、時間の経過とともに歴史という新たな資源を獲得しました。ぜひ、みなさん呉を訪れてください。

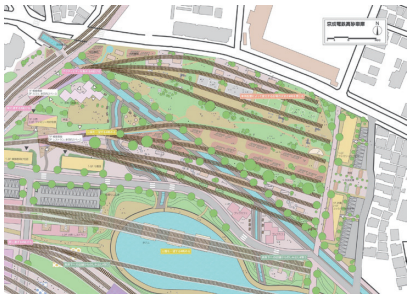
卒業論文を終えて

卒業研究に当たっては『軍港都市』について考えるということからスタートしました。自分の好きなことについて研究できたことはとても幸せでした。心残りもたくさんありますが、修士でリベンジして今度こそやり切りたいと思います。

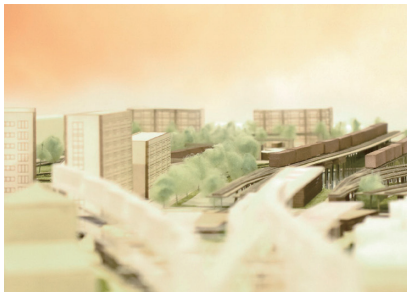
No Railway, No Life.
―密集都市を彩る余白：駅・軌道・車庫―

應武　遥香

Haruka OTAKE



◀詳細設計の一つ、車庫の地区公園化



▶駅の正面入口から線路の広がりと車庫公園をまちと併せて一望

卒業設計で伝えたいこと

通勤通学に欠かせない鉄道は生活の一部にもかかわらず、鉄道そのものは高架化・地下化により忌避されています。そこで、鉄道を資源として捉え、空間としても生活の一部に取り込み、生活を彩るものとして活かすことはできないかと模索しました。

卒業設計を終えて

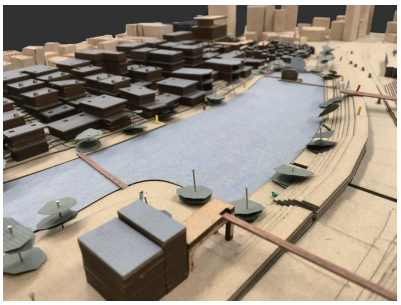
鉄道ファンだけでなく、一般市民も鉄道を心地良いもの・素敵なものとして捉えてくれないかと思い、そのための設計をするつもりでした。しかしそれは叶いませんでした。線形や勾配、建築限界などの制約条件や、安全性などの課題が多く、妥協点を見出せなかったなと思います。

十二社・半日常保養池
―水景と広がる西新宿滞在―

沼田　康祐

Kosuke NUMATA

◀超高層ビル街。各ビルに強い個性がある



▶かつてあった池を復活させ、そのまわりに保養所を設ける

卒業設計で伝えたいこと

副都心・西新宿の将来に対する危機感。働き方が変わり始め仕事場に通うという習慣がスタンダードではなくなり、同時に余暇の時間が増える中、オフィスばかりが建ち並ぶ西新宿の将来がどうなるのかより考えられればいいと思いました。

卒業設計を終えて

未だに終わった気がしないですし、不完全燃焼という感じです。スケジューリングから実際の設計内容まで反省すべき点が非常に多いので、大学院ではそれらを活かしていきたいです。とはいえ、しばらく設計はやりたくないですが…

博士課程修了 宮下さんインタビュー

Interview with Mr.Miyashita who Completed Doctoral Course

インタビュー二つ目として、博士論文の審査を終えたD3宮下貴裕さんにお話を伺いました。

慶應大学SFC中島研出身で、2015年秋からこの研究室に所属している宮下さん。研究室会議などでお会いすることはあるものの、学問について向き合ってお話をしたのは今回が初めてでした。

日本人の公共空間論を再考させる「みち」という概念を示した博士研究の内容にはじまり、博士に進むこととは、私たちはなぜ研究をするのか、といったことまで研究者の先輩としてたっぷりとお話していただきました。

（聞き手：M1前山、箭川　編集：前山）

博士論文「わが国の戦後における『みち空間』思想の構築と展開に関する研究」

―研究の概要を教えてください

宮下：ストーリーで一番伝えたいのは動機のところ。最近いろいろな分野で「公共空間の活用」が謳われていて、「広場」がキーワードになっていると思うのだけど、そもそも戦後の法体系の中での「広場」の位置づけは不明確で、語る人によって定義や空間イメージが異なる。曖昧なことが良いとも言えるんだけど、だからこそ過去を振り返っても有効に利用されている広場は少ない。

そういう背景がある中でこの研究では「みち」というキーワードを扱った。日本に無かった「広場」とは違って、「みち」は日本人の感覚に蓄積されてるものじゃないかと思っていて。そういうものが今後我々の日本における空間デザインにとって非常に重要な概念となるのではないかと。既存の研究を見てみると、戦後の「道」に関する潮流を振り返るような研究も出てきていて盛んになっているけど、それらは基本的に行政とか国とか市町村が実施した道路整備の系譜を追うようなものが多い。実際は行政が作った道路だけじゃなくて、建築家とか市民とかを含めた民の立場にいる主体も連続的に「みち」というものと人間の関係性を語ってきた。それが現在の議論にちゃんと反映されていないのではないかという問題意識からこの研究をしようと思った。

日本に無かった「広場」とは違って、「みち」は日本人の感覚に蓄積されてるものじゃないか

―具体的にどのような内容なのでしょうか

宮下：構成としては『論』の第一部と『実』の第二部の二部構成。

第一部の内容は主に３つあって、一つが雑誌メディアの媒体において「みち」がどのように語られたのか、もう一つがそこから派生して「みち」について語った人物、特に黒川紀章と芦原義信と槇文彦に注目して、「みち」を活かして生み出した空間デザインにおける思考の論理を明らかにするというもの。あともう一つは建築家であり都市建築分野の研究者である上田篤に注目して、研究者の立場から如何に都市というフィールドで「みち」の価値を見いだしたのか。

第一部は様々な場所を対象にした様々な人物の思考の総覧という部分が大きいので、じゃあ実際に具体的なフィールドではどうかというのを考えたのが第二部。銀座通りという空間で、そこで実際に生活する一般市民や地元商店主らが「みち」というものをどのように捉えて自分たちのまちづくりの運動に展開していったのか、その空間において実際に建築活動を行った建築家や設計者が銀座通りをどのように考えてつくっていったのか、またその両者に行政を加えた三者が銀座通りという空間においていかに関係していたのか、それらに着目していった。

結論としては、「みち」というものに日本人特有の共有する空間イメージが存在していて、所謂「広場論」の系譜とは別に、わが国独自の空間のあり方の系譜が確かに存在するということを示した。でも冒頭に言ったように、現在の公共空間の議論にそういったものがちゃんと反映されているかというと必ずしもそうではなくて、例えば街路空間の活用に関する議論などにおいては、海外でのデザインの発想をそのまま輸入するようなものが大多数であるのが現状。「みち」空間についての先人の考えを活かすという歴史的意識をもう一度我々が持つことが必要なのではないかという提言で締めくくりました。総じてみると歴史研究ですね。

―「みち」という言葉について

宮下:今回あえて「みち」と造語で言っています。路地の「路」、道路の「道」、小径の「径」など日本語で「みち」はたくさんあるんですよ。それは「みち」から派生したイメージで、それぞれの人の中で自由に想起される。それらをまとめて「みち」と呼ぼうと決めた。今回は都市の中のどんな空間についても「みち」としてイメージすることが切り口として重要だと思っていて、公共空間でも、建物の中でも、非建ぺい空間でも関係ない。領域を問わず集めた総体として「みち」と呼んでいる。

―宮下さんの研究における「みち」の定義づけはかなり重要なポイントだという印象を受けました

宮下：いかに自分の切り口を見つけるかは大事だよね。僕は既存のイメージとか歴史観に対する疑いがかなりあって。言葉とかイメージの定義はかなり重要だし、それを再度問う必要があると思っている。空間デザインをやるときに、「ここに広場をつくろう」とか言っても、その「広場」が何なのか分かっていないと、結局ベンチを置くだけ、とかになりがち。それだと言葉に何の価値も見い出せていない。「みち」を扱うと決めたとき、そこで想起されるイメージを明らかにしたかったので、どう切り取るか、定義づけるかは自分の研究を構築する上でかなり重要だった。

―第二部のフィールド、銀座について

宮下：銀座に出会ったのはある種偶然。中島先生の紹介で３年半くらい、臨時職員として銀座通りの街づくり協議会にお世話になっています。きっかけは確かに偶然なんですけど、博士論文の後半に位置付けるに足りると思った根拠はしっかりあって。銀座はいろいろな主体に語られた歴史が残っている。ただ空間があるだけでなく、その空間を語った記憶とか、アクションしていった記録が蓄積されている。それらの蓄積があって初めて一つの空間に対してどういう意識が持たれていたかが分かる。市民の動きというのは実際に空間化されたものばかりではないから。銀座は建築家にも行政にも、市民にも語られていて、かつそれがしっかり記録に残っているという意味で、全国の中でも非常に特殊な、注目するに値する空間だと思っている。ただ、発表の時にも指摘された通り、銀座はかなり恵まれている事例。それを日本のみち空間の一つとして一般化できないというのも確かなんですよ。それは僕も迷ったところなんだけど。何の研究でも、一つケースを選ぶというのは難しい問題だし、それを通して全国の都市空間を象徴させることはできないので、それは非常に難しい問題ではあるなと思う。

―対象地選びは私たちもなかなか決断を出来ずにいます……

宮下：そうだよね。でもそれは発表とかでも絶対に言われるし、最後までついて回る問題でだと思う。でも自分なりの論理があれば良いというか。結局それがベストは分からないし、結局自分が出会った空間の中で語るしかない訳だから。

―博士研究で苦労や上手くいったことはありますか

宮下：苦労はあまり参考とすべき研究が見つからなかったこと。自分で切り口をつくった研究なので、あまり直接的に参考にできたものが少なかったんですよね。初めの切り口自体を意味がないと言われてしまうと、全部意味がないということになってしまうので、それは最後まですごい不安だった。なんとか最後は納得してもらったところがあるんだけど。いかに学術的な価値があると定められるかが自分としては問題だった。

上手くいったところは自分なりの切り口を見つけたことで、今まで照らされていなかった領域の議論を発掘で来たこと。それがあるから、自分の研究に意義があると思えた。だから良い所と悪い所は表裏一体だったな。

―博士生活についてどのようにすごしていたか

宮下：歴史研究ということなので資料集めが多くて、大学に来ていないときは国会図書館やいろんな図書館に行ったり、銀座に行ったりしていましたね。圧倒的に本を読む時間が多かった。本は好

きなので良かったけど。資料収集と文献を読み込むこととが大半。だからたまに富士吉田とかに行くのも違う方向性として楽しかったですね。

―文献を読む、国会図書館に行く、というのは中島先生が指導の際よく仰っている印象があります

宮下：まさに、僕は中島イズムの中で育ってきたので。学部３年で中島先生のゼミに入ってお世話になることになった。中島先生は昔も今も一緒で「都市を読む」とか「時間意識を持つ」ということをかなり重視しているし、その中で記録とか文献をしっかり読むというアプローチは自然と身についたんじゃないかな。博士論文でも SD、都市住宅、建築文化の 1958 年から 1984 年までのは全部読んで、その中で自分の定義に当てはまりそうなものをひたすら集めた。テーマを絞るからにはその中を全部見ることは必要だと思う。なんとなく引っ張てきたんじゃないって言わなきゃいけないから。資料を全部見るというアプローチは大事じゃないかなと思いますね。特に歴史のことを明らかにしようと思えば。

だから勉学をやる自分はそれに負けないくらいのスタンスを保てていないといけない

―以前マガジン (2017 年７月号) の博士座談会にて、「元々大学の先生になりたかった」と仰っていましたが、今後も大学に残られるのでしょうか

宮下：そうですね。とりあえず来年は研究員として東大に残ることになりそうです。その先も大学の中で研究活動をしていけたらと思っていて、今のスタンスをさらに発展させて勉強していきたいなと思っています。自分の家族が全員教育者で、自分も教育に携わりたい気持ちはずっとあって。でも好きな研究もやりたいし、それで大学の先生になりたいと思うようになりました。

銀座についても、ご縁があってライフワークとなるフィールドと出会えたので、引き続きお付き合いができればいいなと思っています。博士課程で出会った人とかまちとかが今後の自分の研究活動でも重要な位置を占めてくるのかなと思う。非常にありがたい出会いだったね。

―同じ記事で「博士を取った後の選択肢は修士で就職するのとは違う」ありましたが、どういうことでしょうか

宮下：東大都市工は違うかもしれないけど、普通の大学だと理系とはいえ大学院に進学する人は少数派。僕のいた SFC は大半の人が就職して。だから自分の位置づけを考えざるを得なかった。5 年もたてば、社会の中でいろいろな経験を積むじゃないですか。だから勉学をやる自分はそれに負けないくらいのスタンスを保てていないといけない。モラトリアムだと思ってしまうと何の意味もないということを意識していた。

研究は自分の人生の上にあるんだろうなとはすごく思う

―研究者を志す中で、なぜ都市やその歴史が研究対象になったのでしょうか

宮下：僕は高校まで自由研究をやっていて、そのなかに音に関することがあって。例えば黒板をひっかく音って、「黒板をひっかく音です」と言うのと何も言わないので感じ方が全然違うのよ。それはイメージの話だけど、人にとって環境ってかなり大事なんだなと思って。人が住む環境についての関心が高かったですね。あと、僕は静岡市出身で、静岡は城下町だし歴史がすごいあるはずなんだけど町並みは普通なんですよ。だから見えない歴史とか見えない文化の蓄積があるんじゃないかと思うようになって。それで都市の時間とか、歴史に興味をもつようになった。生い立ちとか育ってきた環境とかの蓄積で今の関心が形作られていますね。

誰でもそうだと思うけど、その人がその研究を選ぶのは固有のバックボーンがあってのこと。それはいくら人に批判されても、自分特有の感性は自分の過去と切り離せないというか。研究は自分の人生の上にあるんだろうなとはすごく思う。そういう意味で研究というのはすごく個人的なことで、一方で如何に世の中にとって意味のあることをやるかというのも大事なんだけど、大元はやっぱり自分の人生とかこれまでの生活体験というものがあるから研究をするんじゃないかな。

―最後に、これから研究していく学生にメッセージをお願いします

宮下：僕が外部の大学から来て思ったのは、都市を語る場が必要だということ。銀座がなぜ面白いかというと、地元の人たちがまちを語る場があって、それが継承されているから。まさに都市デザイン研究室という場が、みんなが都市を語り合う場で、みんなが価値観をぶつけあったり共有したりする場だと思うんですよ。こんなに人数もいるしね。そういう場のありがたさというか、良い所を感じてほしいなと思う。特に最近は研究室会議もフランクな感じになったし。昔の緊張感のある空気も得難い環境ではあったと思うけど、いまの自由活発に意見交換できる場も重要。今後みんなが卒業した後も間違いなくその場は残っていくし、同期と会ったらその時自分がしている仕事とか都市のこととか語り合うんだろうし。その都市を語る場がしっかりとあるということは大きな価値がある。それを存分に活用すべきだし、大切にしてほしい。

製本した博士論文と。
一時間にものぼるインタビュー、ありがとうございました！

Information

Hey listen, -ちょっと聞いて！

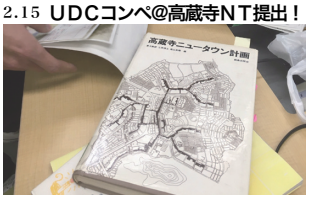
2.4-5 初めてのジュリー

9 月入学の僕にとって初めての都市工ジュリーが行われた。無事発表はできたが、今後の研究について再び考えることは山積みだ。(M1 松本)

2.11-28 卒業旅行に来ています

学科同期達と３週間かけてヨーロッパを巡っています。ベネチアではゴンドラを漕ぐという体験をしました。なかなか難しい…！(M2 但馬)

2.15 UDCコンペ@高蔵寺NT提出！



滑り込みで提出しました…皆忙しい中、コンセプトから具体的な空間提案まで考えることをチームでできたのは改めて楽しかったです！結果はいかに…（M1 奥澤)

2.23 まちづくりのつどい

富士吉田市西念寺にて、住民の方に国道拡幅に際する地域への影響を説明しました。住民の方の意見を取り入れて、より良いまちづくりを目指します。(M1 藤原)

審査やジュリーも終わり、本格的な春休みに差し掛かった２月。研究室メンバー個人の活動や長期旅行も増えてきました。

2月の Web マガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

高島平 50 周年記念展示、開催中！

高島平の歴史が映りこむ都市空間を、50 周年にちなみ 50 個紹介。3/1 まで板橋区役所、3/2,3 は高島平区民館で展示します！

2.24-28 富山 PJ メルボルン視察

コンパクトシティ先進都市のメルボルンに視察に来ています。Livable City 世界一も納得の仕掛けがたくさん見られます。(M1 仙石)

3月の予定

Lab. Meeting
冬休み

2nd, 3rd	高島平 50 周年記念イベント
12th (Tue.)	手賀沼 PJ　現地調査
19th-21st	内子 PJ　現地発表
23rd (Sat.)	復興デザインスタジオ　現地発表
24th (Sun.)	富山 PJ　社会実験
25th (Mon.)	研究室追いコン
26th-27th	三国 PJ　現地報告会

編集後記

音楽が好きだ。なんとなくやる気が出ないとき、忙しい日々の中で上手く気持ちが消化できなくなったとき、音楽を聴くと何とかなることがある。今回特集した研究においても、音楽がなければ私はきっとテーマを発表することすらできなかった。まっすぐな声で歌われる言葉は流動体となってどこへでも届き、私たちの考えを、在り方を肯定する。それに支えられて私は何とか動くことができる。本当の心は本当の心へと届く。私もちゃんと伝えていきたい。(M1 前山)